

大島正隆文書

東北中世史研究の先駆者

—地域史研究にかけた34年の生涯から—

大島正隆（1909～1944）は、若くして亡くなった日本中世史の研究者です。牧師・大島正健（札幌農学校クラーク教室1期生）の孫、生物学者・正満の長男として台北に生まれ、麻布中学を経て旧制第二高等学校に進学しました。キリスト教学生寮に起居し、二高山岳部のリーダーとして活躍する一方、正義感の強さから学生運動に身を投じ、投獄・拷問・退学を体験します。釈放後、関係者の理解により検定試験を受けて東北帝国大学法文学部に入学し、日本史を専攻する一方で柳田国男に民俗学を学び、東北の地方史の先駆的な業績を残しました。

今回整理を終えた資料329点の中心は、大島自身の書簡や、手帳、史料調査時のフィールドノート、大量の調査メモの類などの一次資料です。その他、柳田や牧健二、西田直二郎など著名な学者の受講ノート、登山活動や信仰の様子を伝える資料、逝去の後に関係者が作成した資料なども含まれています。

今回はその中から、二高在学期のものとして、獄中から母にあてられた手紙1通、東北帝国大学在学期のものとして、柳田国男に提出された連続講義単位取得のためのレポート等、副手時代のものとして調査メモや手帳、それに没後の関係資料を展示します。



昭和11年（1936）、27歳で東北帝国大学法文学部に入学したときの大島正隆